噂的な用法は 19 世紀に拡まったとある
が、ボードレールはこれをとくに意識的に
用いている。
「夢」や「脳髄の祝祭」を表現してい
る芸術家はバンヴィル、ユゴーのみな
らずドラクロワもギーもワグナーも
「詩人」と呼ばれ、評価にはかならず「翻
訳」の語が用いられた。ワグナーを初
めて聴いたとき「私の想像力が止むに止
まれずなくした翻訳について私自身が語る
こと、私自身それを言葉によって翻訳す
ることを許して頂きたい」と印象を語っ
ている。詩人と批評家は「翻訳」を介し
て一つのものとなる。
「現代生活の画家」には「G 氏も自身
の印象を忠実に翻訳することによって事
物の結節点を [...] 時には人間の記憶に有益な誇張さえも加えて即座たせる」とあ
る。さらに、現代都市生活情景の匿名の
G 氏による「翻訳」を前にした鑑賞者
がその絵を読み取ること、すなわち再度
「翻訳する」ことを強いる過程に注
目し、最上の批評は翻訳であるという認
識にいたる。「見る者はここでつねに明
瞭で陶酔させる一つの翻訳をさらに翻訳
する者となる。」「或る芸術家のデッサン
から涌き起こる精神的省察や夢想は多く
の場合批評家がそれについてなしの最
上の翻訳なのだ。」
「翻訳者」こそ表現者であり、芸術家
と同列になりうる。芸術作品を享受する
読者、鑑賞者も「翻訳」を通じて作品に
参入する可能性が示される。ポーの翻訳
者でもあったボードレール自身この「翻
訳」という概念に次第に大きな意義を認
め、これを一つの基準にまで深化させて
いったことが、その批評全体を通じて跡
づけられる。
（国際基督教大学大学院博士後期課程学生）

『初稿感情教育』読解
——〈物語〉から〈カタログ〉へ——

中井 敦子

ここでの〈カタログ〉とは、さまざまな
の分野にわたる既存の、つまりすでに語
られ書かれている要素が、脱文脈化・
断片化されたうえで、互いに隣接する必
然性なく列挙されているテクストを指
す。通常の物語における出来事の展開
が、作品の内部論理に支配方rearpré-
sentatif であるのにたいし、〈カタログ〉
における事項の並列は、内部論理とは一
線上に画し反representatif な傾向をもつ。

物語中での〈カタログ〉形成の動きは、
プロベールの数多くの作品にみとめられ
る。物語外に既存するクリシュや知の物
語中への移しがけ・再配列は、一般にフ
ロベールの小説に新しい生命を与えている。
それ自体としては banalité にすぎ
ぬものが物語に同化するのとは別の形で
並べられることによって、小説は新しい
あり方を獲得するわけで、遺作『ブヴァ
ールとベキュシュ』にその典型をみるこ
とができるよう。

ところで『初稿感情教育』は、30年と
いう隔たりにもかかわらず、『ブヴァー
ル』との間に類縁性を有している。まず
『初稿感情教育』中には、この遺作の〈第2巻〉におさめられるべき『紋切型辞典』の項目に対応したクリシェが数多く挿入されている。また第21章では書物が重要な位置を占め、さまざまな書物に誘発されたジュールの夢が、古代ギリシアに始まって18世紀にいたるまでほぼ正確に時代の流れを追った形で記述される。ここでの夢想の記述は、想像の拡がりをvraisemblableに再現したものというよう、一種の文化史・文学史に近づいている。さらに、異例の長さをもつ最終章〈第27章〉を埋め尽くす知の論拠のテクストは、『ブヴァール』〈第1巻〉同様、二人の主人公のさまざまな領域における関係を物語りつつも、当時の政治や文化、全般についてのリストとして自立する傾向をもつ。

『初稿感情教育』中の〈カタログ〉形式は小説後半にゆくに従って進行し、それに伴なって語りの構造も変化する。Vraisemblableなfictionとしての小説を支えてきた〈3人称＋単純過去〉によるレシは停止し、それにとってかわるのは、小説のテクストが時々刻々と生成しつつあるエクリチュールにかかならぬことを明言する、語り手一作者と称するjeと複合過去・現在によるディスクールである。このjeは、小説を一つのspectacleにすぎぬものとして突き放し、登場人物を幕が下りたあとの舞台に並んだ俳優にたとえて、各人物の後日誌を列挙する。そしてこの後日誌にも、通常の物語のarticulationとは異なる傾向がみられる。

このように、『初稿感情教育』は初期作品でありながら、たんなる習作にとどまるものではない。この作品は、現実を再現・模倣し一つの内部論理によって統一された物語と断片的テクストの集積との間を行きつ戻りつするというプローブ的エクリチュールの一つの重要な特質を、すでに明らかに体現しているといえるであろう。（同志社女子大学非常勤講師）

「サラムボーの死」についての一考察

瀬戸和子

すでに一昨年の発表で作家の両性・多様への夢が、マトとサラムボーの恋に反映、具現していることをみたが、今回はこの恋を人物関係、歴史的背景等物語全体から考え、ヒロインの神秘的死の意味を探することで、そこに託された作家の夢の続きを追ってみたい。

サラムボーはハミルカルの娘として登場しハミルカルの娘として死ぬ。が、その魂は〈死の婚礼〉によってマトとの愛を永遠に生きるかのようだ。その死は彼女を縛っていた父の世界、カルタゴ世界からの解放であり、父を殺した現実の婚約を否定する、夢の世界の勝利を意味しないだろうか。この父の世界の否定、現実の世界における夢の世界的の提示は、傭兵たちの狂乱を静めるため登場したサラムボーの科白のなかにすでに読みとれるのである。

我々はまずこの伏線的テクストから対